青年期における教師からの自律性支援の認知と信頼感，援助要請行動との関連

立　川　友　賀

グローバル化や科学技術の進歩により，多様で変化の激しい現代の社会では自律性が重要視され，教育現場で子どもの自律性を育てることが求められている。自律性支援は，「学習者の視点に立ち，学習者自身の選択や自発性を促そうとする指導上の態度や信念（Deci & Ryan，1987）」と定義されている。この指導方法は，教師にも児童生徒にも良い影響を与えることが明らかになっており，現在および将来の教育実践を改善するための重要な可能性を秘めている。先行研究によって，児童生徒が自律性支援を認知すると内発的動機づけやエンゲージメント，学業成績が高まることが明らかにされてきた。しかし，先行研究では自律性支援が学習場面に与える影響を検討しているものが多い。そこで本研究では，自律性支援による関係性への効果に着目し，自律性支援から信頼感や援助要請など，対人関係への効果を検討した。

18歳の学生（高校生，高専生，大学生，専門学生）200名を対象に，中学，高校で出会った印象に残っている教師を尋ね，その教師からの自律性支援の認知，その教師への信頼感，その教師への援助要請行動についてオンラインで調査を実施した。

その結果，まず自律性支援の認知が高いと信頼感，援助要請行動も高い傾向があることが示された。続いて，自律性支援の認知から援助要請のパスにおいて信頼感が媒介するモデルを検証し，信頼感が媒介している可能性が示唆された。また，信頼感尺度の安心感因子のみの媒介効果も確認された。役割遂行評価因子の媒介効果は心理・社会面の相談行動には確認されなかったが，学習・進路面の相談行動においては確認された。このことより教師への相談行動全般において重要な信頼感の要素は安心感であると考えられる。役割遂行評価の項目は，生徒が教職という職業についている教師に対して期待する，教師としての役割に関わる項目（中井・庄司，2008）であることより，これらの項目の得点が高いと，相談行動としては教師の仕事の主である学習や進路に関することになったと推測される。さらに信頼型類型の視点からは，生徒は教師に対する安心感だけ，役割遂行評価だけが高いことよりも，情緒的な役割と教師としての役割遂行の評価の両方が個人の中で高いことが望ましいことが示唆された。

加えて，教師への相談行動の内容や現在受けている影響から，教師の属性によって生徒が求めているサポートに傾向があることが明らかとなった。自律性支援の認知が高いほど受ける影響も大きく，その影響として挙げられたものはポジティブな内容のみであったため，教師は自分の求められている役割を理解し，その中で自律性支援的なサポートを行うことがより効果的であると考えられる。